

# 病害虫発生予報 第5号(8月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所  
TEL 0736(64)2300

## < 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 縮葉枯病 ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ イチモンジセセリ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	やや少 並 並 並 並 やや少 やや少 並 並 並 やや少 並		ミナキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	並 並 やや少 やや少
			カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアサミウマ ゴマダラカミキリ	少 やや少 少 やや少 やや少 やや並
			カキ	炭そ病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 やや少 やや少 やや少 やや並
野菜	疫病 モザイク病 アブラムシ類 ハダニ類	やや少 並 やや少 並	果樹全般	カメムシ類	やや多

## 気象予報

1か月予報（予報期間 7月26日～8月25日 大阪管区气象台）

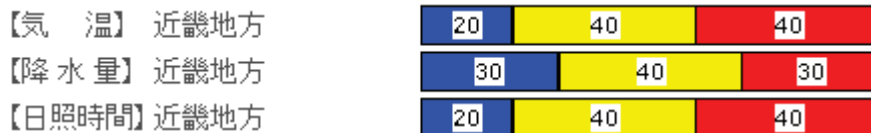
< 予想される向こう1か月の天候 >

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例:  低い(少ない)  平年並  高い(多い)

8月	月平均気温 (平年値) (°C)		月降水量 (平年値) (mm)	
	和歌山	28.1	和歌山	86
潮岬	26.7	潮岬	233	

# I. 水 稲

## 1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の葉いもちの発病株率は0%（平成10.4%）であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における7月中旬の葉いもちの発病株率は0%（平成4.0%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期の追加防除を行う。
- ② 常発地では次年度から罹病性品種の作付を避ける。

## 2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発病株率は0%（平成3.2%）であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における7月中旬の発病株率は0%（平成0.4%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂期に発病株率5%以上のほ場では、穂ばらみ期に薬剤散布を行う。
- ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加散布を行う。

## 3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発病株率は0%（平成0.1%）であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における7月中旬の発病株率は0.8%（平成0.1%）であった。
- ③ 媒介虫であるヒメトビウンカの8月の発生量は並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカの防除を行う。

## 4. ニカメイガ 第2世代（県北部・中部）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の25株あたり被害茎数は0本（平成0本）、県北部・中部の普通期栽培では0本（平成0本）であった。
- ② フェロモントラップ（紀の川市）の4月1日～7月20日の誘殺数は0頭（平成0.5頭）であった。
- ③ 近年、発生が極めて少ない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代幼虫による心枯茎を認めたほ場では、第1世代成虫の予想発蛾最盛期（平成8月15日頃）から1週間以内に防除を行う。

## 5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の25株あたり発生密度は7.5頭（平成7.2頭）、県北部・中部の普通期栽培では25.8頭（平成9.6頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平成10.0頭）、上富田町0頭（平成0.7頭）、那智勝浦町0頭（平成1.3頭）であった。

## 6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の25株あたり発生密度は3.3頭（平成6.7頭）、県北部・中部の普通期栽培では1.7頭（平成6.2頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成3.8頭）、上富田町2頭（平成16.6頭）、那智勝浦町17頭（平成113頭）であった。

## 7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の25株あたり発生密度は13.3頭（平成52.7頭）、県北部・中部の普通期栽培では11.4頭（平成54.1頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市11頭（平成196頭）、上富田町26頭（平成192頭）、那智勝浦町3頭（平成129頭）であった。

## 8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の25株あたり発生密度は0頭（平成0.1頭）、県北部・中部の普通期栽培では1.0頭（平成0.2頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市3頭（平成1.6頭）、上富田町0頭（平成0.9頭）、那智勝浦町1頭（平成1.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫4～5頭の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

## 9. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の25株あたりツトム数は0（平成0.1）、県北部・中部の普通期栽培では0（平成0.1）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢期の防除に重点を置く。

## 10. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の25株あたり上位2

葉の被害は0葉（平年6.0葉）、県北部・中部の普通期栽培では0葉（平年0.5葉）であった。

② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による6月1日～7月20日までの誘殺数は、1頭（平年2.0頭）であった。なお、今年の初誘殺時期は7月14日で、平年は7月18日であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 飛来時期から、第1世代の発蛾最盛期は7月下旬頃と推定される。

② 防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル等）の場合は第2世代幼虫発生時期（第1世代の発蛾最盛期の7日後）である。

③ 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

## 11. 斑点米カメムシ類

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培の本田における7月中旬の捕虫網20回振りによる捕獲虫数は8.8頭（平年11.6頭）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。

② 雑草地のイネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までには場周辺を除草する。

③ 出穂後、本田内でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシなどの飛来を認めたら、乳熟期（出穂10日後）から糊熟期（出穂20日後）に薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期（出穂3日後）にも薬剤散布する（「防除指針」参照）。

## II. 野 菜

### 1. 疫病

（1）予報内容 発生量 やや少

（2）予報の根拠

① 県中部の露地栽培トマト、ミニトマトにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（過去6年間の平均8.3%）であった。

② 8月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。

### 2. モザイク病

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 県中部の露地栽培トマト、ミニトマトにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（過去6年間の平均0%）であった。

② 8月のアブラムシ類の発生量は平年よりやや少ないと予想される。

（3）防除上考慮すべき諸点

① アブラムシ類の防除を徹底する。

### 3. アブラムシ類

（1）予報内容 発生量 やや少

（2）予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の寄生葉率は0%（平成：ワタアブラムシ0.2%、モモアカアブラムシ0.1%）であった。
- ② 黄色水盤（紀の川市）への7月1～20日までの飛来数は10頭（平成25.7頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① モモアカアブラムシ、ワタアブラムシは、薬剤感受性の低下がみられるので、同一薬剤の連用を避ける。

#### 4. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および寄生葉率は、カンザワハダニでそれぞれ40%（平成28%）、7.5%（平成9.2%）、ナミハダニでそれぞれ10%（平成14%）、5.0%（平成1.7%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 薬剤抵抗性が発達している事例が多い。同一薬剤の連用を避け、系統の異なる複数の殺ダニ剤を交互散布する。

#### 5. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は40%（平成28%）、寄生葉率は4.5%（平成5.6%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① ナスでは、選別時に被害果実を認めたら防除を始める。
  - ② 施設では、栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

#### 6. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率1.8%、寄生葉率0.1%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
  - ② 施設では栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

#### 7. ハスモンヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率4.8%、寄生葉率0.2%）であった。
  - ② フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市28頭（平成25頭）、和歌山市67頭（過去3年の平均107頭）、御坊市146頭（平成136頭）、印南町6頭（平成60.1頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 中・老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢幼虫期（網目状の被害葉がみられたとき）の防除を心がける。
  - ② 抑制エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

## 8. シロイチモジヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年9.5頭）、御坊市42頭（平年76.4頭）、印南町3頭（平年97.4頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① ハスモンヨトウに準ずる。

# Ⅲ. 果 樹

## <カンキツ>

### 1. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生園率は9%（平年42%）、発病度は0.6（平年1.9）であった。
  - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 秋雨時期における後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。
  - ② 枯枝や剪定枝の除去を徹底する。
  - ③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

### 2. かいよう病

- (1) 予報内容 果実発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生園率は12%（平年30%）であった。
  - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 防風対策に努め、台風の接近等で強風雨が予想される場合には、事前に薬剤散布を行う。
  - ② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。幼木、高接樹ではミカンハモグリガの防除も徹底する。

### 3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生園率は20%（平年39%）、寄生葉率は3.9%（平年17.0%）、100葉あたり雌成虫数は6頭（平年28頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤を年間に2回以上使用しないことが重要である。

### 4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期 第2世代2齢幼虫最盛期 8月5半月（平年よりやや遅い）  
発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県予察ほ場（無防除区、有田川町奥）での第1世代成虫の初発時期は平

年よりやや遅かった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生園では、8月中旬に散布むらのないように葉裏まで十分量の薬剤散布を行う。

#### 5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の被害園率は18%（平成16%）、発生園率は1.5%（平成13.1%）であった。

② 県予察ほ場（日高郡由良町）における黄色粘着トラップによる7月11～15日の誘殺数は33頭（平成134頭）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 寄生果率が15%以上または100果あたり15頭以上に達すると防除する。

② 発生園およびイヌマキやサンゴジュの隣接園では防除を徹底する。

#### 6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場、各地域とも成虫の初発は平成よりやや遅かったが、6月の発生量は平成並であった。また、7月の成虫の発生量も平成並であった。

② 発生源となる放任園や管理不良園が増加している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 成虫の捕殺に努め、放任園周辺など発生が多い園では薬剤を主幹から株元に散布する。

### <カ キ>

#### 1. 炭そ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発病果率は0%（平成0.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病枝や果実がみられる場合は剪除する。

② 夕立が続く場合は追加防除を行う。また、台風が接近した場合は事前に薬剤を散布し、できなかつた場合は台風通過後速やかに散布する。

③ 密植園の風通しの悪い場所は発病しやすいので、園内の通風・採光をはかり、薬剤をかかりやすくする。

#### 2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発病葉率は、「富有」2.5%（平成12.3%）、「平核無」・「刀根早生」0.5%（平成2.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布する。

② 盛夏期には病勢がおさまるが、分生子は飛散するので防除が必要である。

#### 3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや少



(2) 予報の根拠

- ① 県北部における前年10月の「富有」の円星落葉病の発病葉率は0.5%（平年4.5%）、角斑落葉病の発病葉率は7.1%（平年23.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病は樹勢が低下すると発病が助長される。  
② 角斑落葉病は二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

#### 4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の寄生果率は、「富有」8.7%（平年12.2%）、「平核無」・「刀根早生」2.0%（平年2.5%）であった。  
② 県北部における7月中旬の発生園率は、「富有」77%（平年79%）、「平核無」・「刀根早生」41%（平年33%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬中旬が1齢幼虫の発生時期にあたり、防除適期である。  
② 薬剤が果実に十分かかるよう茎葉の混み合いをなくし、丁寧に散布する。

## < 果樹全般 >

### 1. カメムシ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県内47地点におけるチャバネアオカメムシの越冬成虫数は、落葉50リットル当たり2.1頭（前年0.1頭、平年0.3頭）であった。越冬成虫の捕獲地点率は51.1%（前年6.3%、平年16.0%）であった。  
② みなべ町東本庄の予察灯における6月1日～7月20日の越冬成虫誘殺数は、チャバネアオカメムシ5,746頭（過去4年の平均2,129頭）、ツヤアオカメムシ4,202頭（同2,441頭）であった。  
③ 紀の川市粉河の予察灯における6月1日～7月20日の越冬成虫誘殺数は、チャバネアオカメムシ2,181頭（平年434頭）、ツヤアオカメムシ1,227頭（平年339頭）であった。  
④ ヒノキ花粉飛散数比（本年／前年）は0.2であり、カメムシの発生量に対して餌となる球果の量が少なくなると考えられるため、新成虫の発生量は少なくなるが、果樹園への飛来は多いと考えられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。  
② 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。  
③ 農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や各地域のJA等の調査情報を参考にし、対応する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>